

# MSJ-IRI, MSJ-RW から MSJ-SI へ

—— ICM90 以後 ——

## 日本数学会 学術委員会

1990 年、京都において国際数学者会議 ICM90 が開催されてから 20 年余になる。

ICM90 に至る前史としては、まず IMU 等の海外の機関に援助されたいくつかの国際集会有った。1955 年の東京日光シンポジウムがその最初のものである。NSF と学術振興会との共催によるセミナー等、二国間の機関の協力による集會も開催された。科研費が海外渡航・外国人招聘に使えなかった時期、日本人研究者の海外渡航はしばしば頭脳流出の形となった<sup>1</sup>。当時、国際的な学術的集會開催のために国内で調達可能な資金としては、財界の複数の財団・基金をスポンサーとする助成があった。とくに、数学においては 1974 年から 1997 年まで、谷口財団の援助によって計 41 回開催された「谷口シンポジウム」は、日本の現代数学の流れに大きな足跡を残した<sup>2</sup>。数学会の会誌「数学」では、来日した海外研究者の一覧と、それらの講演の個々の記録が掲載されていた。

ICM90 以後、特に 90 年代後半以降は、日本の研究者にとって環境が大きく変化した。

学術振興会・文部科学省による科学研究費の使い勝手が制度上次第に柔軟になり、研究者個人での海外渡航、あるいは外国人の招聘も可能となった。21 世紀に入ってからのこの 10 年間、COE, GCOE 等の新たな制度の出現もあり、公的研究助成は、使い方の自由度とともに、利用可能な総額も増加したと受け止められている<sup>3</sup>。現在、数学に限らず、個々の研究者、少人数のグループ、あるいは各研究拠点、国内で国際集會・ワークショップを企画・開催することも難しくなく行われている。数理解析研究所では 1991 年から「プロジェクト研究」の企画が始まり、また 2008 年からは「谷口」の closed な集會の後継と位置づけられる合宿型セミナーも開始された。一方では、二国間の機関の協力による開催されてきた国際研究集會は日米セミナー、日仏セミナー、日ソ・日露セミナー等の名のもとに、公募形式の制度として現在まで継続している<sup>4</sup>。谷口財団は解散したが、他の財団（あるいは NPO）の助成をえた国際集會は今もなお

<sup>1</sup>1960 年頃までの状況の例として、私費による航路の往來を繰り返し経済的負担が相当大きかった、と関係者から聞いた。1980 年代にはいっても渡航費用を自費負担を必要とする状況がなおあった。

<sup>2</sup>谷口財団の助成は基礎科学全般、さらに哲学などの人文科学にもわたっていた。

<sup>3</sup>1994 年～2010 年までの状況である。今後、特に GCOE 等の制度終了後の動向は不明である。

<sup>4</sup>学術振興会では他に「国際研究集會」の公募もある。

企画開催されている<sup>5</sup>。

日本数学会ではICM90の後、現在にいたるまで、次の3種の国際研究集会のシリーズを主催してきた。

MSJ-IRI (1993~2006 日本数学会国際研究集会 MSJ- International Research Institute)  
MSJ-RW (1996~1999 日本数学会リージョナルワークショップ MSJ- Regional Workshop)  
MSJ-SI (2008~現在 日本数学会季期研究所 MSJ- Seasonal Institute)

この記事では、これらの3シリーズが成立した経緯を中心として、日本数学会と関連した国際研究集会について述べる<sup>6</sup>。

## 1 ICM90直後

ICM90の直後の時期、国内の代表的な国際研究集会としては次の事業によるものがあつた。

- 谷口シンポジウム (1974年~1997年 計41回)

国内外の若い研究者が寝食を共にする1週間前後のclosedの合宿をコアとし、参加者が互いの良き知己となる機会が提供された<sup>7</sup>。closedの集会と共に、openの集会も隣接した時期に開催され、報告集が出版された。

- 数理解析研究所の「RIMS 共同利用」によるもの

強力な事務体制、会場と宿泊施設の確保がある。1991年からの「RIMS 国際プロジェクト研究」は公募採択された通年テーマによる長期滞在型の企画である。ひとつのプロジェクトの中に(複数の)RIMS 共同研究、RIMS 研究集会、国際研究集会が含まれ、また「夏の学校」が企画されるケースもある。直接MSJ-IRIと対比されるあるいは関連する形態はRIMS 研究集会である<sup>8</sup>。

---

<sup>5</sup>財団による国際集会以外の、国内の研究集会や若手研究者への助成等については次の「研究助成」の項がひとつの参考資料である。<http://mathsoc.jp/publication/sugaku/somokuji50/kaiho.html> 例えばかつて「表現論シンポジウム」は作行会への年度ごとの申請によって定例化したという(熊原啓作「表現論シンポジウム」とその記録<http://eprints3.math.sci.hokudai.ac.jp/42/>)

<sup>6</sup>他に数学会の企画による国際的集会として「高木レクチャー」のシリーズもある。また、韓国、台湾などの国々との数学会としての交流実績も蓄積されつつある。

<sup>7</sup><http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/taniguchi/taniguchi-j.html> 無理解から戦争へと至ることがなきよう、そのような事業が世界平和の礎となる事業であると財団の創始者である谷口氏は考えたという。資金はあるときに使い手があるうちに使うべきものであり、基本的には、なくなったところで終了すると開始当初から定められていた(谷口氏は戦後のインフレで金の価値がなくなるのを目の当たりにしたという)。

<sup>8</sup>谷口シンポジウムの理念を継承した、寝食を共にする合宿形式の「RIMS 合宿型セミナー」が2007/2008年度から開始された(後述)。

日本数学会では、1990年に学術委員会を設置した<sup>9</sup>。学術委員会内規の付記では委員会の担当事項のひとつとして次が挙げられていた。

ICM90 および satellite conference の経験をふまえ、アメリカ数学会の Summer Institute に類するものを我が国でも将来開催する機運が高まることをが予想される。国際交流委員会とも連係を保ちながら計画を調整する。

当時、文部省・学術振興会関係の助成金である科研費は、海外渡航に使えなかった。数理研の上述の枠組みの利用、日米セミナー等の他は、外国人研究者の招聘においては、先方負担と、財団等からの助成金が、主な資金であった。

## 2 MSJ-IRI 初期：第1回～第6回（1993～1997）

### 2.1 公募以前

アメリカ数学会の Summer Institute をモデルとした研究集会の可能性が1991～2年に理事会、学術委員会において検討された。すなわち、想定されたのは研究発表・討論に加え、院生・非専門家を対象とする連続講演を行う、10日から2週間の、日本数学会主催の国際集会である。背景として、ある法人からの助成が、将来にわたって可能となるかもしれない状況があったという。当時は科研費等の公的基金の使用が大きく制限されていた。資金源として、企業からの援助の受け入れが、数学会主催の催しとして適当か否かが検討された。理事会による検討の結果、場合によっては財団法人等非営利団体との共同主催、共催や後援も可能とされ、やむを得ない場合には、企業等による協賛、後援も許容することとなった。

この集会是日本数学会国際研究集会（MSJ-IRI）と名付けられた。実際には当初の状況が変わって上述の法人からの助成は行われなかったこととなった。しかし、このMSJ-IRIは1992/1993年度より試験的に開始された<sup>10</sup>。最初の3回は公募ではなく、学術委員会のメンバーが中心となって開催された。それらの集会の代表者は、各々次のようなイメージ・構想を持っていたという。

- 第1回： 若い世代への広範な深い影響（AMS Summer Institute がモデル）
- 第2回： 日本のベースアップのための蓄積（報告集の継続的出版等）
- 第3回： 日本を世界にアピールするための舞台（日本人の成果が発表され世界的に認知され、最先端の研究発表をしに海外から人がやってくるような）

<sup>9</sup>初代委員長 落合卓四郎氏（任期1990-1993年）は、講演内容が事前に準備され冊子として配布される Surveys in Geometry の集会のオーガナイズにも携わっていた。

<sup>10</sup>ICM94 を避け、1994年には行われなかった

これらのイメージ・構想と共に、それ以前からある数学会の国際交流委員会（1957～2002）では、戦後、日本の貧しい時代に、欧米諸国から学術活動に関する援助を受けた「恩返し」として、アジアにおける数理科学の振興に資するという方針があった。さらに、アジアのみならず世界各国の数学会との交流促進を図ろうという方針となっていた。公式な目標は第4回からの公募要綱に次のようにまとめられた。

「国内での数学研究のより一層の活性化，次世代研究者の育成，海外の数学者との交流の促進を図る」

## 2.2 公募開始

第4回から開始された公募に際しては、制度設計として開催の便を図るために配慮がなされた。だが、その配慮は以下のように予期とは必ずしも一致しない状況を招いた。

- テーマ公募：公募は「テーマ公募」とされ、応募者は組織委員候補者を推薦するとされた。必ずしも開催責任予定者自身が提案する必要はない。これは資金確保等の重圧が応募への躊躇を招くことへの配慮であった。なお第6回までの応募数は各々6件～10件であった。しかし事実上は、テーマへの応募に採択されることは、応募者が組織委員会の中心となって財源確保に責任を持つこととほぼ軌を一にしていた。
- 数学会からの支援：特別会計からほぼ200万円が助成される<sup>11</sup>。数学会からの助成は、MSJ-IRIの試行が始まる以前の提案ではアジア諸国から若手研究者・学生を招待するために用いることが考えられていた。実際には、また公募開始以後においては、使途に限定は置かれていないが、主に海外参加費用と事務局経費の便宜を図ることが考えられていた。また、「外国人の招待は、数学会からの助成で可能である範囲でよい」とされ、最低限、数学会からの助成のみによっても開催可能となるようにとの配慮であった。しかし実際には、各回の予算規模は、数学会からの助成の他の資金を含めほぼ1千万円～2千万円程度であった。数学会からの助成は、一括して組織委員会に委ねられ、使い勝手のよい潤滑的役割の資金として有効に使われることとなる<sup>12</sup>。

第4回から第6回までの代表者は応募に当たって次のように考えていたという。

- 第4回（1995）に行われた最初の公募で採択された企画の組織委員は、AMS Summer Institute を目標・モデルとするものと理解していた。

<sup>11</sup> 試行期間には数学会からは各回100万～250万円が援助されていた。国際交流委員会から支給された助成金は、後には理事会の扱いとなった。

<sup>12</sup> 数理科学振興会、井上財団、万博基金等による援助、また各大学の特別基金、地方自治体からの援助などもあった。

- 第5回(1996)の代表者は1990年の京都のサテライトコンフェレンスの経験から、同様の国際会議をもう一度行いたいと考えて応募。
- 第6回(1997)の代表者は、第2回の代表者から声をかけられ、数理研にその年とその前年の関連した国際プロジェクト研究の中で位置をしめるものとして応募。

## 2.3 MSJ-IRIの検討：1997年

第1回～3回MSJ-IRIの進行とともに学術委員会の内外の議論では、MSJ-IRIのひとつの問題点として、恩恵をうける人々が限定されている点が挙げられた。

- 最先端の研究者のみが恩恵を受ける傾向にある。
- 教育的役割を十分果たせていないかもしれない。
- アジアの国々から見て参加・交流の場としての成立が難しい。

これらの議論をひとつの背景として、1995年に学術委員会から理事会に、後述のMSJ-RWの企画が提案された。さらに、元来試験的に開始されたMSJ-IRIに対して、1996頃から、理事会・学術委員会による検討が行われた。第7回のテーマ公募選考が終了した1997年初めに、野口潤次郎学術委員長の下に作成された「MSJ-IRI報告書」が理事会に提出された。この報告書による検討の背景は、新たに企画されたMSJ-RWの試行にあたって従来のMSJ-IRIの役割を整理し、運営の改革が求められたこと、特に、組織委員会の事務的な負担の軽減、および数学会からの資金援助に見合った数学会会員への成果の還元についての検討が求められたことである。

第6回までは報告集作成を公募要件としていなかったが、第7回以降は、報告集の発刊が公募要件として明記された。以後は主にASPMから出版されることになる。

1997年の「MSJ-IRI報告書」では次の2点が指摘された。

- 開催実績は肯定的に評価できること(参加者100名超の規模、海外参加者が2割以上、日本人若手研究者にデビュー機会を提供)
- 開催準備改良の可能性(開催手順の標準化、資金源の確保、報告集の数学会からの出版)

なお、当時進行していた科研費使途の柔軟化により「MSJ-IRIの運営がやり易くなる」と予想されている。

MSJ-IRIの将来の開催形態については次のような検討がなされている。組織委員会を「学術的組織委員会」と「事務局」に分割するとき、後者の「事務局」あり方について、モデルケース

として複数の可能性（特定の大学の事務室の中への固定化<sup>13</sup>，イベント請負業者への委託，その他の可能性）が列挙され，それらのメリット・デメリットが検討されている．

実際には，MSJ-IRI は，事務局が学術的委員会に内包されるそれまでの形態を続けることとなる．

1998年数学通信第3巻1号では，第1回から7回までの組織委員（長）による座談会「日本数学会国際研究集会の現状と展望」として，MSJ-IRIの今後の展望・問題点・課題についての議論が掲載された<sup>14</sup>．そこではMSJ-IRIの意義・将来の方向についての議論とともに，会議費の徴収が会議の認知に結び付く面をもつこと，応募に際して「声かけ」が契機となることなど，運営のノウハウに関するコメントがなされている．また，おそらくは科研費の使用可能性の変化に伴い，応募件数が減少したことも記されている<sup>15</sup>．

### 3 MSJ-RW : 全6回 (1997~1999)

MSJ-RW (日本数学会リージョナルワークショップ)の企画が持ち上がったのは科研費の海外渡航への使用が許される直前であった．次のような企画として構想された(学術委員会委員長は野口潤次郎氏，川久保勝夫氏)．

- ある大学を拠点としてある期間，セミナー・講演を行う．それにより周辺の，院生・若手研究者に広く参加してもらえることが想定された．その拠点が全国の複数の場所にわたるように行えば，多くの人々が参加できると考えられた．
- 海外参加者は高々5人程度とし，少人数での研究討論を中心とする．MSJ-IRIに比べ規模は小さい．
- 必ずしも連続的とは限らないが，2週間から1ヶ月程度の期間，研究交流の場を維持する．2,3日の短期日程の参加者も受け入れる．
- 基礎的な解説を含む連続講義を行い，その講義録の出版を集会の目標として設定する．

当時，報告集をまとめて出版するような集会が日本ではあまりなかった．また，報告集出版を積み重ねる意義に対する認識も当初は日本の研究者の間では薄かったという．その時期は数学会からの新しい出版物「メモワール」が立ち上がった時でもあった．MSJ-RWの講義録は，メモワールのコンテンツとしての役割も念頭に置かれていた(MSJ-IRIの報告集は，主にASPMから出版されることになる)．

<sup>13</sup>一時，ASPMの事務局は名古屋大学に置かれていたが，それをモデルとするもの．

<sup>14</sup>前節のまとめは主にこの報告に基づく．

<sup>15</sup>なお数学会会員の海外渡航は1996年度は300件強であったが翌1997年度の海外渡航は500件強であり，急速に増加している(数学通信第3巻第1号，1998年，p. 91)

1996年度から3年間の試行企画とし、数学会より総額500万円、約10件(1件50万円程度)を想定された。実際には6回行われ、各回の予算規模は、数学会からの50万円を含め、100万円程度から、多い時で350万程度だった。

3年間の試行後、1999年のMSJ-RW総括報告書(野口潤次郎委員長)において、次の問題点が指摘された<sup>16</sup>。

- 国際共同研究(少人数のディスカッション)と、連続講義(それによる講義録の出版)との両立は困難。
- MSJ-RWの試行期間中に科研費の海外渡航への使用が柔軟化され企画の大前提が変わった。
- 代表者・組織委員会の負担が相当大きい。本を分担して書くことになり、通常の報告集と異なり、章の間の調整が必要。

MSJ-RWは試行期間の後には引き継がれて行われることはなかった。学術委員会ではMSJ-RWの後継企画の検討もされた。同程度規模の、講義録の出版に焦点をあてた集会の可能性が考えられていたが、諸条件を詰め切れず、理事会への具体的提案にまでは至らなかった<sup>17</sup>。

## 4 MSJ-IRI その後 : 第7回 ~ 第15回 (1998 ~ 2006)

### 4.1 経過

第4,5,6回のMSJ-IRIへの応募は6~10件であった。その後、第7回から応募されたテーマ公募は公開されるようになった。

1998年度 第7回	応募8件
1999年度 第8回	応募2件
2000年度 第9回	応募5件
2001年度 第10回	応募1件(?) (学術委員会報告1999年度第3号に記録なし)
2002年度 第11回	応募4件
2003年度 第12回	応募1件 (前回の再応募が1件)
2004年度 第13回	応募3件 (前回の再応募が1件)
2005年度 第14回	応募2件 (前回の再応募が1件)
2006年度 第15回	応募2件 (前回の再応募が1件)

<sup>16</sup>以下の説明には野口氏からの解説による補足を含む。

<sup>17</sup>講義録を出版する数学会主催の国際的な集まりとしては、後に「高木レクチャー」が別の経緯、異なる形態で成立した。

第7回のテーマ公募には8件の応募があったが、うち4件はテーマ中に「類体論」の語を含み、2件は「組合せ論」「combinatorics」の語を含む「テーマ」であった。第8回以降は、ひとつの分野に複数のテーマが応募されることは事実上なかった。その直後から応募件数は少なくなる。

開催のための詳細なマニュアルは作られなかったが、A4一枚の工程表が開催の目安として組織委員長に提示された。

第7回からは数理解析振興会によって毎回100万円の助成を提供されていた。これは2003年に打ち切られた<sup>18</sup>。

その頃には科研費の使用は総体として柔軟化されてきたが、招聘に必要な書類、規定が大学によって状況がまちまちであり、複数の科研費による複数の招聘の際には、それによる事務負担はなおも避けられなかった。また、ビザ関係の事務手続きの負担は時によって大きかった。

数理解析研究所との共催は既に第2回MSJ-IRIの時から行われた。地方自治体と関係のある施設との共催として、札幌プラザを開催場所とする場合にも行われた。大学COE関係との共催は次の二回ある。

- 北海道大学・大学院理学研究科数学専攻（COE「特異性から見た非線形構造の数学」）（第12回）
- 京都大学経済（COE「先端経済分析のインターフェイス」）（第15回）

また、第15回に応募であってMSJ-IRIとしてではなく、MSJ-IHES Joint Workshopとして実現された企画は、慶應大学のCOEとの共催の提案であった。MSJ-IRIに合わせてサテライト会議が開催されたケースもある。

## 4.2 MSJ-IRI 再検討（2004～2006）

MSJ-IRIの応募数は例年かなり少なかった。第15回のテーマ募集に際して、これまでの枠組みに収まらない提案があったのを機会に、MSJ-IRIの事業の再検討が学術委員会から提案され2004年6月の理事会で承認された。第15回の公募への応募は次の形式の2件であった。

- 海外の機関との共催による海外での開催企画（前回分への応募の再応募。またCOEとの共催でもある）
- すでに継続的に開催されている国際会議の企画

---

<sup>18</sup>組織委員長のひとりによると使い勝手がよく便利で助かったという。

後者は、ひとつには MSJ-IRI の趣旨になじみにくいとの意見から当初は不採択であった。前者は、MSJ-IRI の可能性を広げるとの意見もあり、採択されたが、理事会において、海外での開催が MSJ-IRI の趣旨になじまないと判断され、学術委員会に差し戻された。学術委員会では、最終判断を理事会にゆだねる形で前者の応募が採択された。理事会では肯定され、これが開催された。

上の事態を契機として学術委員会内において MSJ-IRI の再考の必要性が提起された。後述するように、その後再検討の間の一年間の公募休止をへて、後続企画の MSJ-SI が発足することになる。MSJ-IRI の見直しに至った一般的背景としてはたがいに関連した次のような変化があると思われる。

#### ( 1 ) 助成環境の変化

海外渡航、外国人招聘、国際集会の開催のために使える公的な財源の可能性が増えた。それに伴い、MSJ-IRI 開催の財源としては科研費が主要となった。

#### ( 2 ) 国際集会のために利用できる枠組みの変化

数理研の RIMS プロジェクトは充実した成果をあげつつある<sup>19</sup>。新たに COE 等の制度が出現し、活動の一環として国際交流を行っている。一方、谷口シンポジウムは終了した。(なお、2007 年の東大数理、京大数学教室、京大数理研の提言の中で、谷口シンポジウムの後を受けたシンポジウム・セミナーが求められ、数理解析研究所において合宿型セミナーが 2008 年から開始された<sup>20</sup>。)

#### ( 3 ) 海外で開催される集会への関与

日米セミナー等の学術振興会と直接関係したプロジェクトの他にも、研究者により近いレベルで海外の機関と協力して集会が海外で開催されるケースが現れ出した<sup>21</sup>。

#### ( 4 ) 日本における国際集会開催の増加

上の ( 1 ) ( 2 ) ( 3 ) の変化に伴い、単発の国際集会、国際集会のシリーズの開催が増加してきた。数理研の枠組みを利用するもの以外にも、個人・小グループの企画での開催されるものや、持ち回りで各国で開催される企画に日本の研究者のグループが関与しているものが現れだした。韓国などアジアの国々とのつながりが強いものもある。還暦祝いの集会が国際集会となるケースも多い。

<sup>19</sup>毎年 200 人超の外国人研究者が訪問・滞在する。また共同利用計画として国際研究集会も毎年 10 回程度行われる

<sup>20</sup><http://mathsoc.jp/publication/tushin/1201/ito-sympo.pdf>

<sup>21</sup>日本数学会のシリーズではないが、この時期より以前から、1988 年に Johns Hopkins 大学内に設立された JAMI (The Japna-U.S. Mathematics Institute) では現在に至るまで継続的な活動が続いている。谷口シンポジウムにおいても、以前に海外で開催されたケースが 3 回ある (1991 年フランス、1994 年イギリス、1995 年フィンランド)。

実際，MSJ-IRI の再検討の契機となった最後の公募に対する二件の応募等はこれらが関係している．

MSJ-IRI の検討が行われた 2004 年の前後に，数学会では国際交流と関連した再検討が他に 2 つ行われていた．国際交流委員会の解散と，高木レクチャーの開始である．

## 5 国際交流委員会（1957～2002）

数学会の中では ICM90 以前から国際交流に関する事業と担当する委員会として国際交流委員会が置かれていた．ICM90 以降の主な活動としては，次の 3 つの事業があった．

### （1）来日数学者の講演援助（1989～2002）

渡航費・滞在費は別途支給される前提のもとで，講演については文部省，学振，科研費のいずれかよりの援助のないものが対象となり，公募による申請を審査する形式であった．1989 年から 2002 年まで 305 人分が行われた．

最後の支給は 1998 年であり，以後 1999 年から 2002 年までは応募がなく，制度は中止された．

### （2）発展途上国における国際研究集会の援助（1997～2002）

国際交流委員会では「数学の発展及び数学者の交流を促進するため」に，1997 年度から 2002 年度まで国外の「現在経済的に困難な状況に陥っている地域」で開催される研究集会に対する財政的な援助が公募されていた。「援助の条件」は次のものであった．

- － その研究集会が経済的に困難な状況にある地域で開催されること．
- － その研究集会に日本数学会会員が組織委員，プログラム委員または招待講演者のいずれかの形で関係していること．
- － その研究集会の報告集が出版され，その報告集に数学会の援助が銘記されること．報告集を一部日本数学会に寄付すること．

1997 年に一件の採択があり，25 万円の助成があった．以後の公募には応募がなく，この一件のみが採択実績であった．

### （3）寄付金による中国在住研究者招聘助成（1991～2005）

個人（羽鳥浅子氏）から数学会への寄付金による中国在住研究者招聘助成を目的とする「羽鳥プロジェクト」（1991年～2005年 24件総額770万円）が実施されてきた。終了近くには応募数の減少と固定化の傾向が見られた<sup>22</sup>。

国際交流委員会は2002年6月末をもって解散された<sup>23 24</sup>。

## 6 高木レクチャー（2006～）

日本数学誌 Japanese Journal of Mathematics (JJM) は、1924年に創刊された日本で最初の数学欧文誌であった。1924～1975年までの第1シリーズは学術研究会議及びその後継である日本学術会議によって刊行され、その後、日本数学会からの刊行となつてからが第2シリーズとされた。しかし近年投稿数は著しく減少し、2005年には数学会理事会において、JJMの雑誌としての存続可能性が検討された。その際、JJMに、新たな役割として、高い水準のオリジナルな研究総説を掲載というアイデアが提出された。その研究総説は、卓越した研究者を海外から招聘して年に二回講演会を開催し、講演会用に予め準備された原稿を加筆修正して出版する、というものであった。この講演会は「高木レクチャー」と名付けられ、アイデアを提出し従来の制度に新たな命を吹き込んだ小林俊行氏の尽力の下、現在はJJMの新編集委員会によって運営されている。こうして2006年からJJMの第3シリーズが創刊された。高木レクチャーの性格は、小林俊行氏によって次のように説明されている。

「高木レクチャー」は、世界的に卓越した数学者を講演者として招聘し、気概に満ちた研究総説講演を若手研究者・大学院生を含む専門分野を超えた数学者が聴くことにより、創造のインスピレーションを引き起こし、新たな数学の発展に寄与することを目指した企画です<sup>25</sup>。

<sup>22</sup><http://mathsoc.jp/publication/tushin/kaiho92go.html#8>, <http://mathsoc.jp/publication/tushin/1101/kaiho111-11.pdf>

<sup>23</sup><http://mathsoc.jp/publication/tushin/0701/kaiho71-13.pdf>

<sup>24</sup>数学会の事業とは直接は関係しないが、アジアのいくつかの国における国際会議が現地の研究者と日本人研究者の協力のもとで開催されるケースがあった。現在、日本数学会と韓国、台湾の数学会とは深いつながりがあり、また、科研費その他の基金によってアジア等の海外の研究機関・研究グループと共同・持ち回りで国際会議が開催するサイクルが複数の場所で成立している。しかし、そのような助成環境が成立する以前、あるいは、そのような研究機関、研究グループが先方になく、これらの集会は、日本人研究者が個人のつながりと先方の個々の事情に強く依存するものであったとみられる。かつて日本の数学研究者が海外から受けた恩の恩返しという考えは自然なものであるが、その際先方のニーズをきちんと見て行うことはなかなか難しい、という趣旨の意見を関係者から聞いた。

<sup>25</sup>「高木レクチャー」に冠せられた「高木」とは、整数論を象徴しているのではなく、「日本から、オリジナルのもの、良いものを発信する」という精神を象徴しており、講演者は分野にとらわれることなく選出・招聘されず（小林俊行）<http://mathsoc.jp/publication/tushin/1201/TakagiLecture12-1.pdf>

高木レクチャーは、かつてMSJ-IRIの将来目指すべき目標のひとつとして関係者が考えた「日本において、そこで講演することが名誉となる舞台」という役割を、少し違う形で果たしているとも見られる。MSJ-IRIにおいて考えられていたのは、若手研究者の登竜門ともなりうる新しい結果の発表の場であるのに対し、高木レクチャーが実現しているのは、既に定評のある優れた研究者による講演である。

またかつてメモワールの発足時において、MSJ-RWとの連携は「研究集会のシリーズによる、出版物へのコンテンツ提供としての貢献」と想定されたが、高木レクチャーとJJMは、より直接的な連携となっている。

## 7 MSJ-SI (2008 ~ )

### 7.1 MSJ-IRI から MSJ-SI へ

2004 ~ 2005年に学術委員会では小島定吉委員長の下でMSJ-IRIの見直しが行われた。MSJ-IRIの現状をほぼ追認し、受理基準明確化により数学会の主体性の確保するのみの対処では、現在の応募件数の低迷に現れている、制度と需要との不一致は変わらないと考えられた。学術委員会からの要請に対して、理事会では「数学会の積極的な関与による集会の可能性」を学術委員会で検討することが承認された。検討においては、MSJ-IRI廃止の可能性から、数学会が全面的にかかわる事業として設定しなおし、テーマ募集方式をせず、数学会学術委員会と実施組織とが直接企画実施する可能性まで、広く議論された。見直しの対象となったのは(1)存続の意義(2)テーマ募集という形式(3)数学会の関与の程度(4)名称、であった。

振り返ると、MSJ-IRIの事業が持ち上がったときの目標は、その後の経過の中で十分の重きをおいて考えられてきたとは必ずしもいえない。

学術委員会による検討の結果、今後の方針として、現在の数学会にとって可能な範囲において「本来の目的」をより具体化し、再出発する企画の性格として設定することとなった。ここで「本来の目的」とは次のものである。

- 実務の一部を数学会が受け持つ体制
- サーベイの充実
- 国際貢献・特にアジアの国々との交流

最初の2回程度は、学術委員会が積極的にかかわる形でモデルとなる集会を行い、その後、公募を行うこととした。一方、公募において他の規制はできるだけ少なくすることとした。

開催方式についてはサーベイの充実、報告集の出版は公募要項に要請として引き続き盛り込むこととした。しかし、それ以外の形式的要請は公募要件とせず、制約を少なくする方針とし

た．名称については，International Research Institute という従来の名称に変えて，「季節研究所」 Seasonal Institute という名称を採用することとした．

## 7.2 制度

2005年～2007年には引き続き中島啓 学術委員会委員長の下で，新しいMSJ-SIの制度について議論された．数学会からの助成金額はMSJ-IRIと同様の200万円程度であり開催は国内に限ることが公募に明記されることとなった．さらに，

第一に「実務の一部を数学会が受け持つ」ことについて．MSJ-IRIとは異なり，数学会事務局が，限られた範囲ではあるが，実務をサポートすることとなった．主として，以下の援助を行う：理事長名による招待状の発送，ポスターの発送，Webページの管理，講演者の情報および旅行日程の管理，ビザ申請書類作成，開催日レジストレーションの手伝い．

第二に，サーベ이의充実について．MSJ-IRIとは異なり，集会規模については詳細の規定はなく，組織委員会の決定に任せられる．しかし一方MSJ-IRIと同様に，公募要項では「海外からの招待講演者を必ず含むものとし，また招待講演者の一部によるサーベイ形式の講演を行うものとする」こと，また「レフェリーつきの研究あるいはサーベイ論文を主とする報告集を作成し，原則として数学会から出版する」ことが明記されている．

第三に，国際性・アジアの国々との連携について．MSJ-IRIでは採択の選考基準が明文化されており，その最初の項目には「国際性」と記されていた．MSJ-SIの公募では選考基準は明文化されていない．しかし一方，公募要項では「日本数学会と連携する海外数学会・研究所等を通じて，海外からの若手の研究者を招待することを奨励する」とされ，具体的には，台湾，韓国の数学会との提携により，両数学会の推薦による3名ずつの研究者が参加する．これに関する事務手続きは，数学会の理事会と事務局によって手配される．

MSJ-SIは国際会議のオーガナイズの経験のあまりない提案者による開催，運営であっても負担が少ないことが望まれる<sup>26</sup>．継続的な安定した開催を行うために，経験を蓄積し，将来にむけて，集会開催のマニュアルの作成を準備することが，学術委員会での検討課題となった．

## 7.3 現状

MSJ-SIへの応募は，公募となった第3回からは

---

<sup>26</sup>なお「日本数学会主催」という形式をとることにより，海外から研究者を招待しやすくなる側面もあるかもしれない．MSJ-IRIにおいて理事長名の招待状が役に立ったという指摘があった．

2009年度 第3回 応募4件  
2010年度 第4回 応募2件(前回の再応募が1件)  
2011年度 第5回 応募2件

であった。2011年度の2件の応募は、公募締切を半年延長した間のものであった。

開催初日には数学会理事長が挨拶を行い、また開催の間に、韓国、台湾からの招待者を理事長が招いて組織委員長と共に昼食会を行うことがこれまでの慣例となっている。

数学会からの200万円の助成の性格は、MSJ-IRIの開始された当初の「最低限外国人を招待して国際集会を成立させるために必要な金額」から変化した。MSJ-SIのシリーズの国際集会開催は、基本的には組織委員会の主体性によって行われ、主要な公的財源の調達についても同様である。それらの公的財源の使用は、公的性格に伴う義務、責任から強い規制がある。しかし、数学会会員の出資による助成は、研究者の良識的な制約のみに基づいて自由に利用することができ、基本的に使い勝手のよい潤滑的役割を果たすものとされる<sup>27</sup>。

課題であったマニュアル作成準備については、第1回、第2回をモデルにしてその後回を重ねるについて、ルーティーン化できる部分が明確になり、作業過程が整理されることが考えられていた<sup>28</sup>。しかしながら、現在までの数回でも、各回の開催場所、資金源、規模、共催関係、組織委員会の規模・性格などが多様である。少なくとも現在のところは、マニュアル化を行わないことによってかえって事務局も柔軟に動くことができる状況がある。なお、組織委員会へのソフト面でのサポートとして、各組織委員会に対して学術委員会から担当委員を2名程度おき、ルーティーン化しにくいノウハウについての情報提供を行う方針である<sup>29</sup>。

現在までの応募件数はMSJ-IRIの頃と大差ない。現在のところMSJ-SIは、国際研究集会企画において応募対象として有力な選択肢と理解されているとはいいがたい<sup>30</sup>。現在、数学会の主催する国際研究集会の経緯、またMSJ-SIとその公募について、数学会会員の間で十分認知されていないと思われる。まずMSJ-SIがどのような研究集会であるかを会員の皆さんに理解をしていただくことを学術委員会では考えている<sup>31</sup>。

## 8 最後に

現在の日本数学会は、社会貢献が重視されながらも、ひとりひとりの会員の会費を主財源とする一種の自助組織としての性格も強い。振り返ると、いわば有志が持ち回りで無報酬で時間

<sup>27</sup>なお、今後、競争的資金については不透明であり、数学会からの援助は重要性を増す潜在的可能性がある。

<sup>28</sup>主要な課題は事務局と組織委員会との仕事の切り分けであった。

<sup>29</sup>現在の学術委員会の委員には過去のMSJ-IRI, MSJ-RW, MSJ-SIの組織委員経験者が数名いる。

<sup>30</sup>しかし、MSJ-RWとMSJ-SIの両者を組織委員側として経験された方からの感想として、はるかに開催の負担が少なくなったと聞いた。

<sup>31</sup>最近ウェブページを整備し、海外からも情報を見られるようにした。また当記事もその一環である。

と労力を提供するボランティア組織的な仕組みの延長上に現在の体制を見ることもできる<sup>32</sup>。数学会の活動は、数学研究に関する環境整備に資することによって会員に広く貢献することが求められ、そのため数学会のもつ資金の利用の仕方についても慎重な配慮が求められている。

海外での MSJ-IRI の開催が学術委員会・理事会での議論の対象となったのは、ヨーロッパでの集会開催が少数の会員にしか寄与しないと懸念されたためであった。そして理事会では、MSJ-IRI の本来の制度設計では国内の集会が想定されていたと認定された。

なお、かつて初期の MSJ-IRI の発足時に、MSJ-IRI の企画自体が少数の会員にしか寄与しないのではないかと意見も聞かれた。その時には、第一に試行時期の MSJ-IRI の実績（100 名超の多くの参加者があった）、そして第二に MSJ-IRI を補完する MSJ-RW の試行（後者では、複数の場所で開催されれば多くの会員に資するものとなると考えられた）が、その批判に応えるものであり、また報告集作成の責任も明文化された。

やがて間もなく MSJ-IRI 自身が幾つかの分野をカバーし、かつ複数の場所で開催された。一方同時進行的にそもそも国内で国際研究集会が数多く開催されるようになり、個人の海外渡航も容易になった。結果的に MSJ-IRI の役割は、数ある国際研究集会のひとつとして相対的に小さくなった。

日本数学会の主催としての研究集会において共催関係の扱いは当初から明確化が必要と考えられ、MSJ-IRI の制度設計において企業からの寄付については議論された。しかし、間もなく多くの国際研究集会が多様な財源を用いて開催されるようになった。特に、個々の大学の機能を強化・拡充の拠点として構成される COE 等の組織については、出現時は性格が一律に固まっていないかった面もあり、共催も行われると共に、それらとの一定の距離の維持にも留意された。

現在 MSJ-IRI、MSJ-RW の実績は、メモワール、ASPS の報告集として見る事ができる。同時に、これらの集会は、数学会の出版するこれらの刊行物のコンテンツとして寄与をした。

MSJ-IRI の再検討に基づいて 2008 年に MSJ-SI が発足した。MSJ-SI の方針策定においては、MSJ-IRI の 15 年間の諸経緯と環境の変化を考慮するとともに MSJ-IRI 発足時の構想を振り返り、構想を現実の活動とするため、アジア内の連携手段を具体化し、数学会の一步踏み込んだ関与が制度設計に組み込まれた。

日本数学物理学会から日本数学会が分離設立されたのは戦後直後の 1946 年であった。そのほぼ 20 年後、1967 年の「数学」第 20 巻第 4 号<sup>33</sup>における記事「20 年をかえりみて」(彌永昌吉)では、日本数学会の運営に関して次の問題提起がなされている。

「ある意味でもっと基本的な問題とも思われるが、学会は事業拡張にどの程度積極的であるべきか、ということである。‘数物’の今 1 つの分身、日本物理学会は、事業拡張で本会

<sup>32</sup>理事長等を選挙で選出する仕組みが整備されているが、無報酬である。春秋の学会（年会、秋季総合分科会）の運営を担当する大学の大会委員長、実行委員長等の組織委員は無報酬である。また数学会では、春秋の学会への参加・発表のための費用は徴収していない。

<sup>33</sup><http://mathsoc.jp/pamph/history/MSJ20th/>

とはけたちがい積極的に、予算規模も1けた上になっている。本会としてそれにならうべきかどうか、問題と思う。」

1967年からの20年間は、国際交流が進展し、国内からの内発的な企画運営の実績が積み、遂に1990年には、かつてない規模の国際集会であるICM90が開催された。その1990年から現在までさらに20年が過ぎた。この20年間の数学会主催の国際研究集会のシリーズとASPMおよびメモワールから出版されたその報告集の蓄積は、リストとして並べると、海外から見たとき、MSJ-IRI創設時に思い描かれたような、一定程度のインパクトを期待できるかもしれない<sup>34</sup>。

アジアにおける日本数学会の国際協力は、2011年の現在、韓国の数学会との協力の進展等、新たな局面を迎えている。「最後のMSJ-IRI公募」において、最終的には採択されなかったが当初採択が推薦された企画は、日本数学会主催の海外での集会という新しい可能性を評価されていた。その企画は、MSJ-IRIではなく、単発の「MSJ-IHESワークショップ」としてフランスで開催された。このような海外での集会の後続は現在のMSJ-SIの枠を超えるものとされている。

一方、国際交流に使える財源の自由度が増した現在、数学会の主催とは別の経緯をもつ国際研究集会は数多くある。それらの中には、学術振興会、数理研の公募などの財源に直結した形態を取るものがあると共に、そうした形態ともつかず離れずして、各分科会、各分野の研究者集団によって継続的に運営されシリーズとして積み重ねられてきたものもある。「最後のMSJ-IRI公募」において最終的に採択された企画は、当該分野のそうした国際研究集会のシリーズの一環として提案されていた。

日本数学会のいくつかの事業は前述のように会員たちからの会費を基本的な財源として会員自身のために催される。日本数学会の主催する国際研究集会MSJ-SIの今後のあり方を展望しようとするとき、数学会の運営に対する上の彌永昌吉の指摘はなおも、数学会会員の総意を問われる「基本的な問題」であり続けると思われる。

## 9 謝辞

事務局長の張良さんには資料・情報の提供でお世話になった。また、元学術委員会委員長の方々が作成した諸資料を参考にさせていただいた。特に野口潤次郎元委員長には過去の経緯を詳しく説明していただいた。感謝いたします。

(学術委員会：文責 委員長 古田幹雄)

---

<sup>34</sup>英語サイト <http://mathsoc.jp/comm/scientific/index-e.html>

#### MSJ-SI 日本数学会季期研究所

- 2012 年度 : The 5th MSJ-SI Schubert Calculus
- 2011 年度 : The 4th MSJ-SI Nonlinear Dynamics in Partial Differential Equations
- 2010 年度 : The 3rd MSJ-SI Development of Galois-Teichmüller Theory and Anabelian Geometry
- 2009 年度 : The 2nd MSJ-SI Arrangements of Hyperplanes
- 2008 年度 : The 1st MSJ-SI Probabilistic Approach to Geomtry

#### 共催ワークショップ

- 2006 年度: MSJ-IHES Joint Workshop on Noncommutativity

#### MSJ-IRI 日本数学会国際研究集会

- 2006 年度 : The 15th MSJ-IRI International Conference on Difference Equations and Applications
- 2005 年度 : The 14th MSJ-IRI Asymptotic Analysis and Singularity
- 2004 年度 : The 13th MSJ-IRI Moludi Spaces and Arithmetic Geometry
- 2003 年度 : The 12th MSJ-IRI Singularity theory and its applications
- 2002 年度 : The 11th MSJ-IRI Stochastic Analysis on Large Scale Interacting Systems
- 2001 年度 : The 10th MSJ-IRI Representation theory of algebraic groups and quantum groups
- 2000 年度 : The 9th MSJ-IRI Integrable Systems in Differential Geometry
- 1999 年度 : The 8th MSJ-IRI Computational Commutative Algebra and Combinatorics
- 1998 年度 : The 7th MSJ-IRI Class Field Theory
- 1997 年度 : The 6th MSJ-IRI Higher Dimensional Algebraic Geometry
- 1996 年度 : The 5th MSJ-IRI Knot Theory
- 1995 年度 : The 4th MSJ-IRI Nonlinear Waves
- 1994 年度 : The 3rd MSJ-IRI Geometric Complex Analysis
- 1993 年度 : The 2nd MSJ-IRI Topology of Moduli Space of Curves
- 1993 年度 : The 1st MSJ-IRI Geometry and Global Analysis

#### MSJ-RW 日本数学会リージョナルワークショップ

- 1998 年度 : The 6th MSJ-RW Inverse problems for partial differential equations
- 1998 年度 : The 5th MSJ-RW Concentration Phenomena in Elliptic and Parabolic PDEs
- 1998 年度 : The 4th MSJ-RW Mathematics related to arrangements of hyperplanes
- 1998 年度 : The 3rd MSJ-RW Cone-Manifolds and Hyperbolic Geometry
- 1997 年度 : The 2nd MSJ-RW Theories of types and proofs
- 1996 年度 : The 1st MSJ-RW 実解析的方法の非線形発展方程式への応用